

KSKQ

ゆうとおん

通信

NO.119

2021年1月号

郵便振り込み口座 00910-9-106532

編集人 (社福) ゆうとおん通信 編集委員会 八尾市久宝園 2-30-4



2021
 きんがしんねん
 謹賀新年



ことし
 今年もゆうとおんを
 よろしく願いたします。

完登



一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)

10月14日 ゆうとおん全体研修「**呼称を中心に人権問題について考える**」

コーディネーターの堀智晴さんと倫理綱領委員会が中心で研修を開きました。



☆呼び方は「○○さん」か、「○○くん、○○ちゃん」もありなのか？当事者はどう呼んで

ほしい？職員はどう考える？それぞれの思いを、グループワーク含めて、出しました！！

・「自身の心の有り様が問われていると感じた。というのは、言動一つ一つのなかに、無意識のうちに、見下ろしている気持ちや、ひよとしたらため口につながっているのでは・・・と考えさせられたのだ。自身としては、できないこと、苦手なことを支援しているつもりで日々すごしていたが、あらためて身をひきしめねばと考えさせられた。研修の結果というよりも、このような研修によって絶えず考え続けることが大事であると考え。何かの書物で、いじめの一因として優越感を得るためと読んだ記憶がある。支援するものは、どこかで優越感を感じていないだろうか・・・、と気づいた研修であった。自身の心を正し、生活していくことをあらためて考えること、また自身の心に問いかけることであると考え。福祉職は、支援することであるが、またそれと同時に人と人のかかわりの中で行う職でもある。それを心にきざんで全うしていきたい。」(小川恭子)

・「グループ内の意見で、呼称や接し方について、『自分では親しみを込めて、良かれと思ってやっていたけれど、それは自分を正当化・合理化しているだけではないのかと思うようになった』といった自戒を込められた意見があり、とても鍵になる意見ではないかなと個人的には思いました。堀さんのまとめに研修前半の一場面で『職員からの質問に対し、自分の言葉でしっかり答えられていた徳山さんをほめようとしたが、それこそが差別心、徳山さんは答えられないんじゃないかな？という先入観があったから、それに反し、しっかり返答していた徳山さんに対してほめようという気持ちが湧いた。でもそれは、徳山さんの持つ能力を軽んじていたということ』といったようなお話があり、とても共感する部分でした。私自身、そういう自問自答をする場面が度々あるからです。ほめる、ということの良い作用をもたらしたり、喜びから何ら違和感なくその場がお互い笑顔で収まっているように感じるケースもあれば、『相手が、これぐらいできるわ！と内心、不快に思う場面もあるのではないかな』、『それは私が相手を見くびっているということではないかな』、『ほめ言葉自体が失礼なのではないかな』。人や内容・場面にもよりますが、自分でほめながら、言った直後に、そういった疑念が生まれてきたりします。今後もそういう自問自答であったり、気づきからの修正であったりといったことを、きっと繰り返していくのだらうと思っています。」(山谷由佳)

・「自分は、さん付けで呼んでほしい。参加してみて、緊張はしなかったが時間が長く疲れた。出てみて良かった。職員の人がおおあつうさそうだった。今度は、もっとメンバーさんもたくさん参加してほしい。」(寺田直加)

・「くん付けの方がいい。最初は緊張したけど、桃井さんとのやり取りが、うまく説明できてよかった。」(徳山大海)

・「研修に参加された当事者の方より、メンバーさんにもっと参加してもらいたいとの感想があった。今回の研修自体が対等な状況・環境だったのか考えさせられた。次回は是非とも多数のメンバーさんが参加できる場になってほしいと思った。参加者より『長年、○○くんと呼んでいたのに、変えるのに苦労した』との経験談が話されたが、呼び方を変えるのはどこか恥ずかしさがあるものだったと思った。人と人の関わりなので、その時々状況によって、呼び方は変化することもあるものだと思うが、一人の社会人として接するうえでは、「さん付け」を基本としていきたいと思った。今回の研修では、「呼称」について改めて考える機会となった。定期的に、ふだんは特別に意識を向けていない部分にも意識を向け、振り返り、考えていく機会を作っていければと思った。」(栗野真人)

11月25日ゆうとおん全体研修「日本国憲法と障害のある人の基本的人権」

講師：長岡健太郎弁護士 ☆「憲法」とは国家権力に対して守るべきルールを定めたもの



「憲法と法律の違いを知ることができました。今まで、なんとなくわかっているつもりでしたが、改めて研修で話を聞き、考えてみれば違うなと思いました。『合理的配慮』、なんだか都合のいい言葉に聞こえてしまいました・・・」(中村祐実)

「憲法は難しいと自分の中で決めつけていたが、障がいのある人も障害がない人と平等に生きるためには、必要なルールなのだ」と再認識しました。合理的配慮も社会の中では、様々な工夫をされているが、まだまだできていないところもあるだろうと思います」(古川晶子)

「最近SNSなどで個人の意見が見えやすくなりました。中には人権感覚の全くない人の発言が多く見られます。昔よりも、一人ひとりが人権の問題について学ぶ必要のある時代になったように思います」(松田健太)

「障害のある人もない人も『等しく』・・・『平等』(全員を等しく取り扱う)も『公平』(機会が平等になるように取り扱う)も、差が出てしまうのだなあと感じました」(吉田秀樹)

「何となくとつきにくい憲法を分かりやすく説明していただき、そのたいせつさを改めて理解できました。憲法を根拠にして、成り立っている条約や法律の知識をしっかりと身に付け、障害当事者の生きやすい世界をつくるための具体的方策へのヒントをたくさんいただきました」(畑健次郎)

「知らないことが多く、もっと勉強する必要があると感じた。憲法が103条もあることを知らなかった。障がいのある人に優しくしてズルいと思う人が減ってほしいと感じた。権利条約を作るのにいろいろと見直すものがあることに驚いた。障がい者あるあるを見て、理不尽な相手側の言い分が多く、残念でしかなかった。門前払いをする前に、しっかりと耳を傾けてほしい。しっかりと説明がほしいと感じた」(阪上明里)

「憲法と法律について、深く考えたことがなかったので講義を聞いて、憲法は国家権力に対して、法律とは国会が国民に対してルールを定めたものなのだと知ることができた。『障害』とは、社会参加を阻もうとする社会の側のことであって、社会の側が努力して困りごと(バリア)を解消していくとあったが、まだまだ現実的ではないのかな?と思った。日頃の当事者との関わりの中では、『これぐらいできないと』と言っていることが多く、双方が歩み寄っていくことが大切なのだなと思った」(栗野真人)

「障がいのあることが障害ではなく、障がいを持つものが生活を制限される社会のシステムが障害であるという認識が、徐々に広まっていることは大きな前進だと感じます」(佐々木繁一)

「ハード面のバリアフリーは、日本の社会の中で一定程度、進んでいると思いますが、心のバリアフリー(?)は、まだまだ難しいところがあるのかなと思います。国内法を整備すること、権利条約の批准、社会側の様々な努力と同時に、学びの場や働く場で一人ひとりが出会い、日常の中で関係を築き、へだたりなく一緒に過ごせる、そういう目の前の一つひとつを大切に作る視点や行動も大切で、大きな力になっていくと考えます」(松野香織)

「障害者権利条約を批准するため、権利条約は法律より効力があるので、日本ではいろいろな法制度を整えた。しかし、障がい当事者の社会参加を阻もうとする力、バリアが現存しており、そのバリアこそが『障害』そのものなのだということを実感できた。また、『合理的配慮』を強調し過ぎると、一般の事業者にとっては、そこまでの加重的な負担はしなくていいと考えられてしまい、かえって差別が正当化されてしまう。『合理的配慮の不提供』を社会に問うていくよりも、『差別的取り扱い』の不当性を訴えていく方が有効であると知ることができた」(前田裕)



～みんなで決める会2020年～



ねんお おも ことば で またた あいだ す さ
「え？もう1年終わるの？」と思わず言葉が出るほど、瞬く間に過ぎ去った

ねん まいにち ふ かえ よゆう な きつ がつ
2020年。ゆっくり毎日を振り返る余裕も無いまま、気が付けば12月に

かんかく き かい ねん あらた ふ かえ
なっていたような感覚です。みんなで決める会の1年を改めて振り返ると、

はじ ころな なに でき ねがていぶ おも おそわ
始めは「コロナのせいで何も出来なかったなあ」とネガティブな思いに襲わ

しりょう みかえ すば ちょうせん あしあと
れました。しかし、資料を見返していると、素晴らしい挑戦の足跡もあり、

ころな いろいろ いっき ぼじていぶ おも か
「コロナだけじゃない！！みんなで色々やったやん！！」と一気にポジティブな思いに変えられたのです。



ころな いま さわ がつ ならけん えん とうじしゃ かい みな
まず、コロナが今ほど騒がれていない2月、奈良県にある「ちいろば園」の当事者の会、「みんなのかい」の皆さんが、ゆうとおんに来て下さいました。私達は、歓迎のプラカードを持ち、ちいろば園の方々がお到着するのをワクワクしながら待

きくた わたしたち かんげい ぶらかーど も えん かたがた とうちゃく わくわく ま
っていたのが昨日の様です。私達の職場を見てもらい、みんなで食事を共にし、風船バレーでお互いの距離を近づけ、しつもんたいかい て あ ひと おお じかん た ほど たいへんも あ こうりゅうかい
質問大会では手を挙げる人が多くて時間が足りない程、大変盛り上がった交流会でした。

えん がつ はつ ころな りもーとこうりゅうかい かいさい ぼそこん がめんご こうりゅう じしゅく
また、ちいろば園さんとは、8月に初の試み「リモート交流会」を開催。パソコンの画面越しでの交流ですが、自爾
せいかつちゅう す しごと など ほうこく あ
生活中にどのように過ごしたか、仕事はどうなったか等を報告しました。



びーぶるふあーすと かつどう りもーとかいぎ ぼそこんがめんご さまざま じぎょうしょ
そして、ピープルファーストの活動については、こちらリモート会議となっており、パソコン画面越しに様々な事業所の
かたがた ころなういる すたいさくなど いけんこうかんかい ねん ひょうごけん あまがさきし びーぶるふあーすとぜんこく
方々と、コロナウィルス対策等の意見交換会をしています。2021年は、兵庫県(尼崎市)にて、ピープルファースト全国
たいかい よてい げんざい についでい けつてい ころなういるす かくだいじょうきょう わ
大会が予定されています。現在のところ、日程は決定していますが、コロナウィルスの拡大状況ではどうなるか分かり
ませんが、その頃にはなんとか終息して欲しいと願うばかりです。

さくねん びーぶるふあーすとぜんこくたいかいいんおおさか えいぞう かぞく かたがた かくじぎょうしょ めんばー たち
ゆうとおんでは、昨年のピープルファースト全国大会in大阪の映像を、ご家族の方々、各事業所のメンバーさん達に
み ねんまえ できごと えいぞう み いっき たいむすりっぶ おおげい なかま まえ どうどう
見てもらいました。1年前の出来事ですが、映像を観ると一気にタイムスリップするようです。大勢の仲間たちの前で、堂々
たいやく めんばー たち まぶ ほこ こうけい げんざい き かい かいそく さくせいちゅう
と大役をこなすメンバーさん達が眩しくて誇らしい光景でした。現在は、みんなで決める会の「会則」を作成中です。



あらた き かい かんが とき
改めて、「みんなで決める会」について考える時となっています。
いべんとさーくる ひとりひとり じぶん おも えんりよ はつげん
イベントサークルではなく、一人一人が、自分の思いを遠慮なく発言し、
なかま いけん そんちよう ささ あ ぼ あゆ よ
仲間の意見を尊重し、支え合える場としてどのように歩んでいけば良い
ほんき かんが いきお ねん さまざま
のか、本気で考えています。この勢いで、2021年も様々なことに
ちょうせん やくしん おも
挑戦し、みんなで躍進できればと思っています。

き かいたんどうしょくいん まつおかともこ
(決める会担当職員 松岡知子)

グループホーム「ピリカ」は、2020年11月、新しく再スタートしましたので、みなさまにご紹介いたします。これからもよろしくお願ひします！！

グループホーム「ピリカ」は、わらゆんで唯一の男女混合のグループホームです。もともと、「ピリカ」にいた男性、「ゆっくり」からの男性、「のびのび」からの女性2人の4人のグループホームです。「のびのび」からやってきた山本さんと中川さんは、「ピリカ」に移るまで不安そうでしたが、今では「まっちゃん」、「わたなべくん」と仲良くしています。アリオが遠くなったことは、少し不満のようですが、とりあえず、ゆっくりのびのびやっていたらと思っています。(喜友名奈津子)



グループホーム「ゆっくり」。引っ越し当初は、なかなか落ち着かない感じでしたが、徐々に生活にも慣れ始め、それぞれ会話等コミュニケーションも取りつつ、時には笑顔も交えながら仲良く過ごされています。(植田剛太郎)



サテライト型のグループホーム「サテライトゆっくり」も新しくスタートしました。入居された山根さんへのインタビューです。

「グループホームに引っ越してみてもうですか？」

「以前に住んでいたところよりぐっすりと眠ることができています」

「簡単に一日の流れを教えてください」「そうですね、朝は7:30~8:00に朝ごはん。そこからゆっくりとしてから12:30ぐらいにうえーぶ(作業所)に出發します。うえーぶで昼ごはん食べてから仕事ですね。16:00ぐらいにうえーぶを出て16:30に帰宅ですね。そこからは部屋でゆっくりもしますが、近くに住んでいる母の買物の用事を手伝ったりとかもしています。晩ごはんは19:30~20:00ですね。」

「グループホームになって、一番よかったところはどこですか？」

「ごはんですかね。世話人さん、山本さん、宮野さんと話したりして楽しく食べてますね」(藤本勝也)



グループホーム「みぞら」

楽しく、ホームみぞらで生活しています。新しいメンバーさんと共に、食事やコーヒータイムなどでおしゃべりをしたり、一人ひとりのお部屋では、好きな置きものや飾りものを飾ったり、ゆっくりテレビを観たり、音楽を聴いたり、DVDを観たりと思いおもいのことをして過ごしています。ときどきケンカもするけど、仲よく楽しく生活していきたいです。機会があれば、ホームのみんないっしょに旅行やお出かけもしてみたいです。(今井米純)



ぐるーぷほーむ なんくるないさー
グループホーム「ナンクルナイサー」

福島さん「ここは楽しいですか?」「楽しい」「ごはんは、おいしいですか?」(両手で大きなO)
 福田さん「ホームは、楽しい」とテレビを観ながら返答。ときどき、ドラゴンボールのアニメを「いっしょに観る?」と声かけしてくださいます。金曜日の夜は、しきりに「明日お家?」と自宅に帰るのも楽しみにされています。金沢さん「このホームはどうですか?」「騒がしい(笑)」
 中西さん「ホームは?」「楽しいです。」「ごはんは?」「おいしいです。」「好きな食べ物は?」「酢豚。」「ホームの酢豚(その日は酢豚がメニューでした)もおいしかったです。」と笑顔で返してくれました。次の日の予定も伝えてくれ、昼ごはんも、どこで食べるかまできちんと教えてください。夜はラジオを聴きながら、とても楽しそうに過ごされています。(新 神武王)



新しいグループホーム「ほっぷ」・「すてっぷ」 2年半前に始まった10名のグループホーム「ナンクルナイサー」から10月末に、「ほっぷ」・「すてっぷ」に引っ越しました。ナンクルナイサーは、良くも悪くも賑やかなホームでした。自分自身の反省なのですが、人数が多いことでどうしても個々に向き合うことが難しくなってしまう、ご自分から積極的に支援を求めてこれられない方は、つい後回しになってしまう傾向があったように思っています。「ほっぷ」・「すてっぷ」は、人数がそれぞれ5人と、これまでの半分となり、新しい環境に慣れるのも早く、少しずつ落ち着いてきています。「ナンクルナイサー」の時より、ひとりひとりと向き合う時間を増やし、世話人間で連携をとり、試行錯誤を重ねながら支援していければと思っています。(原田 普子)

「ほっぷ」「新しいホームになり、どうですか?」と質問。池田さん「まあまあな」と一言。伊藤さん「今のホームの方がいい」。梶浦さん「まあまあいい。少ない人数になってよかった。皆でトランプしたりしたい」。鳥居さん「今のホームは楽しい。一番の楽しみは12月26日のうちの誕生日」。山口さん「今のホームは楽しいけど、人数が半分に減り、少し寂しい」



・引っ越しして、早くも一か月が過ぎましたが、みなさん慣れてきて、落ち着いておられます。最初はトイレの位置や、世話人が変わり、眠れない方もおりましたが、少しずつ環境の変化に対応されています。広い「ナンクルナイサー」よりも、こじんまりとアットホームなホームです。世話人にとっても、メンバーさんの動きがよくわかります。掃除、洗濯、朝ごはんの調理、連絡ノート記入と、すべてが10人から5人になり、一人でこなせるのか不安もありましたが、自分は「ナンクルナイサー」の時より、動きがスムーズな気がします。「ナンクルナイサー」は、広すぎたのかも! これからも皆さんと楽しく生活ができるように頑張ります!(木谷美和子)

「すてっぷ」

ホームに戻ると、まず、小林さんが「洗濯物を取りにいこう」と声をかけてくれます。その声を合図に、小崎さんもベランダに。同じ「はーと」の「さをり班」で過ごす二人が、同じホームで暮らし始めてから1か月あまり…。食事中に微笑みあう様子からは、お互いに心強さを感じているような印象を受けます。小林さんが洗濯物を畳みながら「ワンワン」と犬の鳴きまねをするとすぐに、もう少し細かい声で小崎さんも「ワンワン」と応え、楽しそう。

そんなコンビがもう一組。西矢さんと和田さんです。「うえーぶ」の「内職班」でも、隣り同士の席で仕事をしていた二人は、今度はホームでも隣り同士の席に着き、ごはんを食べています。日中を振り返り、共通の話題で盛り上がっては、笑い声がリビングに響くと、皆が楽しくなって笑い出します。

笑い声と言えは、小路さんです。「晩ごはん、なに〜?」「何時に食べる〜?」と世話人にもよく声をかけてくれるので、小路さんが帰ってくると、すてっぷは一気に賑やかになります。

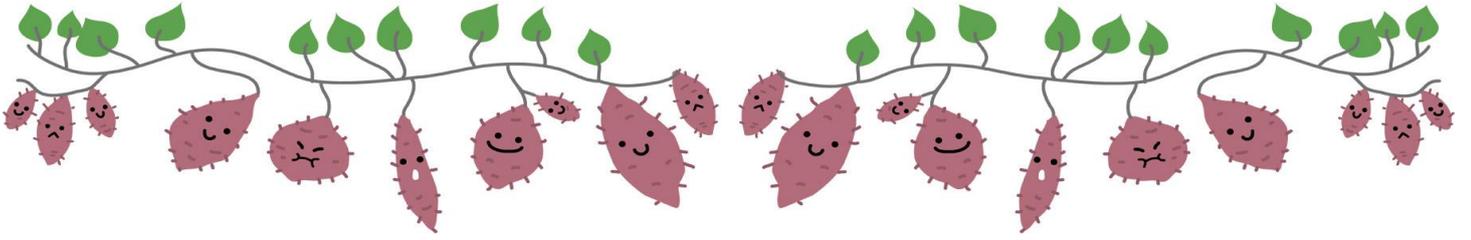
皆さんに住み心地をたずねてみると、小林さんは「快適」、和田さんは「西矢さんと一緒に嬉しい」と答えてくれました。皆さん、一緒にすてっぷでの暮らしは「楽しい」と言ってくれています。でも元々「ナンクルナイサー」で生活していた西矢さん、小崎さん、小路さんからは「ほっぷの皆さんと一緒に御飯食べたい」「原田さんにも泊まって欲しい」「堤さんいつ来る?」「新洞さんに背中洗って欲しい」等々、今まで関わってきた人との距離が少し離れたことへの寂しさも聞かれ、そんな気持ちを同時に抱えながら過ごす日々の心情が伝わってきました。

私は11月から、すてっぷに世話人として配属されました。世話人の先輩方は、どんな質問をしても快く答えてくださいます。このような温かい支援する人同士の繋がりが感じられる中に身を置いて有り難く思っていますが、何より生活されている皆さんと関わっている時間がとても楽しいです。支援する人達の温かい輪の真ん中に、皆さん一人一人がいることを感じてもらえるように、私も努めていきます。(川西和子)



・現在、「ほっぷ・すてっぷ」で生活されている、ほとんどの方と、これまで世話人として関わってきているので、皆さん、私のことも知ってくださっていることと思います。

新しいホームでは、初め、何がどこにあるか探すことも多くて、焦ることもありました。なので、皆さんも初めのうちは、少しオロオロされることもありましたが、今では随分、慣れてこられたと感じています。これからも、それぞれ別々の希望や拘りなど持つ、皆さんの個性を大切にしながら生活することを、世話人がチームとなって…「チームほっぷ、チームすてっぷ、チームゆうとおん」として、応援していけたらと思っています。(植田孝子)



ほ さつまいも掘り

ゆうとおんの^{びおとこ}ピオトープへ、みんなで、さつまいも^{ほり}掘りに行きました。お^おおきなものでは、^{30センチ以上}30センチ以上の^{おお}大きさの、さつまいもが^{しゅうかく}収穫できました。



やさい^うも植えています。
お^{だいこん}おきな大根、とれました♪



2020年の経験を糧に新しい年にチャレンジを!

特定非営利活動法人ラルゲット 豆子(西尾)寿士
公認心理師・相談支援専門員

今回、特にテーマの指定もなく、急に原稿を依頼された。なかなか原稿が進まない、新型コロナウイルスの話題は避けたい(中途半端な雑感的意見は控えたい)など状態から苦し紛れに思いついたのが、今年購入した本を列挙してみることであった(書名と著者のみ記す、通し番号を付与)。

1月①『スタンフォードのストレスを力に変える教科書』ケリー・マクゴニガル、

2月②『君たちは今が世界』朝比奈あすか、③『あなたの心を操る人たち』ジージ・サイモン、④『心の傷を癒すということ』安克昌、⑤『ソーシヤル・マジヨリテイ研究』ミニニケーション学の共同創造』綾屋紗月、

4月⑥『朝鮮語辞典』⑦『病は口くせで治る』原田文植、⑧『思考の整理学』外山滋比古、⑨『一人になりたい男、話を聞いてほしい女』ジョン・グレイ、

5月⑩『毒になる親 一生苦しむ子供』スーザン・フオワード、

6月⑪『言葉の力、生きる力』柳田邦男、⑫『こんなとき私はどうしてきたか』中井久夫、⑬『1日1ページ』

ジ、読むだけで身につく世界の教養3645』『デイヴィッド・S・ギター』、⑭『資本主義の終わりか、人間の終焉か? 未来への大分岐』マルクス・ガブリエル、⑮『不道德的倫理学講義』人生にとって運とは何か』古田徹也、⑯『コーヒーマグカップの耳』阪神沿線喫茶店「輪」人情話』今村欣史、

9月⑰『トラウマによる解離からの回復』断片化された「わたしたち」を癒す』ジエーナ・フィッツシャー、⑱『精神疾患をもつ人を、病院でない所で支援するとき』まず読む本』横綱級』困難ケースにしないための技と型』(小瀬古信幸)、

10月⑲『幸せに生きるためのカウンセリングの知恵親子の苦しみ、家族の癒し』藤田博康、⑳『エマおばあちゃん、山をいく』アブラチアン・トレイルひとりたび』ジエニ・フリー・サームズ、㉑『山中伸弥先生に、人生とiPS細胞について聞いてみた』山中伸弥、

11月㉒『エピソード記述入門』実践と質的研究のために』鯨岡峻、㉓『精神医学ハンドブック第7版』医学・保健・福祉の基礎知識』山下格、

12月㉔『サバイバル登山』服部文祥、㉕『発達障害』精神科医が語る病とともに生きる法』思春期のころと身体Q & A』②『崎濱盛三』、②⑥『ニコロが軽くなるエクササイズ』越川房子、

これらの本はすべてアマゾンから購入したもので、だから購入履歴から列挙できた、書店で手に取って購入し

たものは含まれない。だが、記憶を辿っても書店で購入した記憶はない。今年は書店をぶらぶらする時間も無かつたということだろうか。「ラルゲットだよりVol.18」筆者が理事長を務める大阪市城東区にある特定非営利活動法人ラルゲットの通信。2020.8.21発行)を読んだ友人から届いた二冊の本も紹介したい。『ヒマラヤ大聖者の免疫力を上げる「心と体」の習慣』と『成功の源泉 瞑想がひらく人生の真理』共にヨグマタ相川圭子。お礼の手紙も書いていな不義理を詫び、深謝の意を示したい。

読書に関しては、衝動買いを控えるため、自宅に近い大阪府立図書館を利用している。ネットで借りる本を予約して、お知らせメールを受信すると取りに行く。手軽で便利である。こちらの履歴は辿っていないが、今年は何年に比べて極端に少ないと感じている。やはり生活に余裕が無さすぎるのだろうか。

日頃、同僚から、「何を考えているのか分からない」、「一人で抱え込んでいる」という批判を受けてきた。自分の頭の中に(心の中)にある考えなどを他者に伝える時間と技術が欠けていたと反省している。こうやって購入本を列挙することも紙面が許すなら、その解説もあれば尚よいのだろうか、他者に伝える方法の一つだろうと、このような原稿になった言い訳しておきたい。

最後に、2020年は歴史に残る一年となったが、出会った出会いは直した人々への感謝と、また新しい年に向けて時に歯を食いしばり、時に満面の笑顔で、歩み続ける決意を示して終わりたい。新年が皆様にとって光り輝く一年になりますように!

当世作業所事情 81

畑健次郎

「ワークワークとさみしさのあいだで」

Mさんは5月末までグループホームの住人でしたが、6月から一人暮らしをはじめました。

「はじめはワークワークしていたけど、今はさみしい」と言います。そういえば半世紀以上前の私の一人暮らしも、ワークワークとさみしさの間を行ったり来たりしていたような気がします。

彼氏のこと、仕事のことなどを一通りしゃべり終えたMさんが、帰り際、「あれは西村さん？」と訊きます。12月になるうとしていますが、西村智美さんの遺骨は、まだわらゆん(グループホーム事務所)にあります。年が明けたら、遺骨の一部は一心寺に納める予定です。

グループホームから旅立った人は西村さんで4人目になります。田中清代美さんを除いて、みんな私より年下です。いつも、これでよかったですやらかと、悔いが残ります。

晩ごはんの後、うたた寝から目が覚めたら、三島由紀夫を取り上げた番組が流れていました。

50年前、彼は自衛隊の市ヶ谷駐屯地で、隊員に決起を呼び掛けた後、割腹自殺しました。時代錯誤の狂気なのか、彼の美意識による象徴的行為としての時代の先取りなのか、若かった私たちはそれなりの衝撃を受けました。

彼は、自衛隊員の救国魂に一縷の望みを託して決起を呼びかけました。

しかし彼が決起を呼び掛けた自衛隊員は、軍人というよりサラリーマンでした。サラリーマンたる自衛隊員に三島由紀夫の訴えは届きませんでした。

そんなことくらいは百も承知で、自分の理念を開花させるための未来への遺言だったのかも知れません。ぼんやりと思いを巡らせているうちに、また夢のなかに吸い込まれてしまいました。

テレビの中の三島由紀夫は、思想的には対極に位置する若者たちの反体制運動に対して、「諸君の熱情は信じます」とエールを送っています。

もし彼が生きていたら、実利的なことには長けていたけれど、理念のかけらも感じさせない管さんたちを見て、どう言うのか聞いてみたい気がします。

三島由紀夫が自決した前後の時代、多くの若者たちが体制批判の運動に参加していました。たいした考えも思慮もありませんでしたが、私もその流れを信じて参加したひとりでした。

やがて自分もまた一人の生活者として、この国の慣習や法律、人間関係の規制を受けていることを否応なく自覚させられるようになります。

その時、自分の中でこれだけは誓ったことは、どんな状況下でも抵抗する精神だけは持ち続けよう、そして権力へへつらうようなことだけはすまいということでした。

運動の波が小さくなってからも、細々と活動をつづけていましたが、ちょうど30才の時、大きな

挫折感と無力感を味わいました。一時期、社会的なことや政治的なことなど考えず、ひっそりと今日と明日のことだけ考えて生活しようと思いました。

その時、私を支えてくれたのは「弱さを克服せよ」という叱咤激励ではなく、「あんたはあんたでしゃあない」と受けとめてくれた人たちの存在でした。弱いままでも、欠点だらけでも「あなたは、あなたらしく生きていてもいい」と言ってくれる人や社会の存在は、だれにとつても必要な養分です。

ずっと後に、仲間たちとゆうとおんを始めた時も、かくあらねばならないという集団ではなく、個人個人の言葉にならない思いも持ち寄れるような集団でありたいと思いました。

組織運営が苦手な私たちは平場の関係にこだわりました。混沌としていましたが、いつも何をしたいのか、何をしたいのかということがテーマでした。

法人格をとったあたりから、経営的にはある程度安定しました。それに伴い、通所メンバーや入居者、職員も増えました。

やがて、何をしたいいけないのかということが組上りのぼることも出てくるようになりました。

リスクマネジメントという考えも分からぬ訳ではありませんが、手段であるはずのゆうとおんという法人の保身が自己目的化しないように、私たちは気をつけねばならない段階にきています。

相模原事件に典型的ですが、障害者の匿名化、

記号化は今の社会や福祉業界を象徴しているような気がしますが。なぜ被害者である障害当事者が匿名で扱われねばならないのか、私たちは重い問いの前です。

今、私たちが作成している障害当事者に対する支援計画ももろ刃の剣です。その人の思いや課題を可視化して「支援」に役立てるための一助になるのは確かだとしても、そこに自分をクロスさせなければ、効率的な管理ファイルにもなりかねません。

その人を取り巻く状況を把握することは必要ですが、生きた人間は標本ではないので、絶えず揺れ動いています。その揺れをどうキャッチするのは、キャッチする人の人間観や感性、知識、経験、思い入れ・・・、様々な要素が反映されます。

11月の予定表に小さな字で囲みのコメントを入れました。字が小さすぎて読みにくいという人もいましたので、そのまま転記します。

ゆうとおんは「生きている」こと自体が価値だということベースにして活動をつづけてきました。時には波風も立ち、混乱することがあるとしても、きちんと多様性が保障されるような集団でありたいと願ってきました。

言葉通りうまくいかないことも多々ありますが、上意下達の一方通行にだけはすまいと思ってきました。そのためには「私たち」に流されない「私」の存在が不可欠です。「私たち」は「私」があつてこ

その「私たち」です。

反差別とおたがいさまの気風があればどこかで通じ合えるはずです。

役職や立場にとらわれず、ゆうとおんという広場の一員として、障害当事者をはじめ、家族、職員、支援者も積極的に声を上げていきましょう。

ゆうとおんという集団にとって大切なのは、ゆうとおんを構成する一人ひとりが個人として尊重され、「私」を持っている「私たち」でありつづけることです。

いつの間にか、ゆうとおんは日常的に顔の見える関係より少し大きくなってしまいました。

組織が個人（私）を呑み込んでしまわぬように、「異端狩り」に走らぬように、自由な言論が保障されるように、気をつけて運営せねばなりません。

昨年（2019年4月）、脑梗塞で入院した後、あの人から、そろそろ引退してはとすすめられました。私は自分に残された時間で、もう少しやりたいこともあったので断りました。

ゆうとおんの中に行くと、あれやこれやと目につくこともたくさん出てきます。思わず口や手がでることもあります。

つい先日、ある出来事に関する私の言動に対して、開設当初から一緒に働いてきた土橋さんから、「わからぬではないが、結果的に（分断）をもたらし、いい結果を生まないのではないか」と批判されました。言われてみればその通りなので、その件に

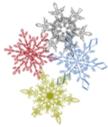
内容的には直接触れている作業所事情の原稿も打ち直しました。そして例によつてますます訳の分からぬ内容になりましたが、いつものとおり「まあいいか」と相変わらず進歩はありません。

このところ、日中職員の合同会議はリモートです。操作のわからない私は、他の人の手を煩わせることになりました。少し心理的な負担感があります。安易な連想ですが、通所メンバーやホーム入居者も「手助け」される負担感があるような気がします。そこからくる遠慮が、たとえば「このクソじい！」と言いたいのを我慢させているとしたら、申し訳ないなあと思ふ余計なことを考えながら、気楽さと味気無さを感じつつ画面をみています。

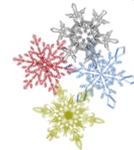
コロナの罹患者が大阪では急増しています。この通信が出るころ、ゆうとおんのみんなはのんびりした正月を迎えることができているのか定かではありません。

「一寸先は闇」とはよく言ったものです。闇の向こうは、また闇なのか、それともほのかな灯りが見えるのか、モク、どうなるんやろかと思うこの頃です。





みんなの さをり織り展



「みんなのさをり織り展」を開催いたしました。
 3月から延期にしていた、年に一度のさをり展。みんなの力作揃いの作品を、多くの方に触れていただけたことを嬉しく思います。継続して開催することの大切さ、開催を協力していただけることのあるがたさを感じた展示会でした。来年も、また開催できるよう、頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。
 11月3日(祝)～6日(金)4日間売り上げ 25万1000円



ゆうとおん協力会・会費へのご協力をお願い

ご協力いただいた新しいグループホームが秋に完成。
 ホームの再編成や引っ越しも終わり、11月から新たなスタートを切ることができました。
 次の夢に向け、一歩ずつ進んでいこうと思います。
 これからも、ご協力よろしくお願いします。

年会費:一口 2000円(何口からでも結構です)
 振込先:ゆうとおん 郵便為替口座 00910-9-106532

社会福祉法人 ゆうとおん

本部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784
 ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883
 ゆうとおんほーぶ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387
 メールアドレス / youtone@live.jp ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>
 年会費 / 1口 2.000円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4階 定価 / 50円

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行 定価50円